黴雨の候　宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部会員諸兄には、益々ご清福の段

大慶に存じます。

皆様には日頃より当支部の運営について格段のご協力を賜り、衷心より御礼を申し上げる次第です。

さて6月の自衛隊関連行事は、18日に宮崎県隊友会と宮崎市自衛隊家族会の総会がブッキングし、やむを得ず家族会総会に参加致しましたが、この会も例に漏れず会員数減少が顕著であり、何処の会も会員増強がメインテーマとなっています。

22日は宮崎県自衛隊退職者就職援護協力会総会がホテルマリックスで開催され、継続的に退職自衛官を雇用する県内企業の社長や人事担当者が参加して、人材豊富な退職自衛官の情報に側耳を立てて聞き入っていたようです。

当支部の経営者の方々も求人に苦労されている事と拝察致しますので、この就職援護協力会に入会されれば、御社の人材確保に大いに役立つ事かと存じます。

また30日は宮崎県護国神社慰霊祭に引き続き、神宮会館に於いて宮崎県偕行会総会が、元陸上自衛隊幹部学校長　陸将　樋口譲次様を講師にお招きして盛大に開催され、大先輩の方々から大変貴重なお話しを存分に伺うことが出来ました。

今月も小川先生から興味深いメルマガが届いていますので、お許しを得て転載致しますので、是非ともご一読下さい。

・米イージス艦、被害局限の教訓

産経新聞（6月23日付）に、**極限状態における危機管理**について考えさせられる記事が載りました。

米イージス艦衝突 「友よ許せ…」 艦を救うため苦渋の決断　**浸水区を封鎖**　仲間取り残す恐れ知りつつ

「【ワシントン＝黒瀬悦成】静岡県・伊豆半島沖で米イージス駆逐艦フィッツジェラルドがコンテナ船と衝突し、駆逐艦の7人が死亡した事故で、22日付の米紙ワシントン・ポストは、乗組員らが**艦の沈没を防ぐため、仲間が取り残されている恐れ**があると知りつつ、**浸水区画の閉鎖**に踏み切ったと報じた。

複数の米海軍関係者が同紙に語ったところでは、同艦の**居住部分に衝突後、大量の海水が流入。**取り残された乗組員の救出作業が数回にわたって試みられたが、

浸水が激しくなり艦沈没の危険が高まったため、居住部分に通じる**水密扉**の閉鎖を決めた。この時点では、**何人が残**されているのかは**判然としなかった。**

7人の遺体はその後、閉鎖された居住部分で回収された。水密扉が閉鎖された時点で**7人が生存していたかどうかは明らかでない。**衝突により艦底付近に開いた穴は直径4メートル近くに達していたという。

関係者の一人は、危機に直面した乗組員らが『**苦渋の選択**を迫られた』と指摘。別の関係者は、結果的には今回の程度の損傷で艦が沈むことはなかっただろうとしつつ、乗組員の迅速な行動が**被害の拡大を防ぎ、自力での帰港**を可能にしたと評価した。

米海軍は、近く同艦のイージス武器システムのデータから事故の経緯を解析する方針。艦を米本土で修理するため、巨大な重量物運搬船に載せて輸送することを検討しているという」

この記事を読んで、**2001年9月11日の同時多発テロ**の当時を思い出しました。

当時の**小泉純一郎首相**をはじめ政府の当局者は、「テロリストに**ハイジャックされた旅客機**が、乗客を満載した状態で**人口密集地めがけて飛**んでくることがわかったとき、**撃墜できるのか**」という深刻な命題を前に頭を抱えていました。

小泉さんの気質からすれば、それでも撃墜を命じるだろうと想像したものですが、撃墜したあとの世論の追及は必至です。よほどの覚悟がなければ，しかもごくごく**短時間に決断**できなければならないと、自らを小泉首相の立場や旅客機の乗客の身に置き換えて考えたものです。

今回のフィッツジェラルドのケースでは、紹介されているワシントン・ポストの記事の通りだったとしたら、浸水した居住区の閉鎖を**決断した指揮官と閉鎖作業を行った乗員の心中、**そしてかりに**生存者**がいた場合、彼らの心の内はいかばかりだっただろうと思わざるを得ません。

コンテナ船との衝突で負傷した艦長が、それでも搬送中のヘリの機内や搬送先の病院で命令したのか、艦長の権限を引き継いだ副長が決断したのかは定かでありませんが、このとき浸水区画の閉鎖を命じた指揮官にとって最優先すべきは、一にも二にも**沈没の事態を避け、残る200人以上の乗員の生命を守**ることだったことは間違いないところです。

居住区に残された乗員のことを考え、**断腸の思いで命令**を下したことは想像するまでもありません。

そこで私たちがフィッツジェラルドの事故から学ぶべき教訓は、この浸水区画の閉鎖を**国家国民の安全の問題に置き換**えて、適切な対応ができるかどうかの能力を身につけることではないかと思います。

ハイジャック機の突入だけでなく、**事故や災害**でも同様の事態は起こり得ます。政治家や政府・行政組織の**責任者**は、このような状況における決断について、そして**国民の側**はそれを受け止めるに当たって、**いかにあるべきか**を真剣に考えておく必要があると痛感させられました。（小川和久）

軍隊だけに限らず組織の長ならばこのような決断を迫られるシーンは種々想定されますが、大変悩ましい問題だけに、その責任者となった場合は如何なる行動や決断をせねばならぬのか、またその結果責任についてはどのような批判が待ち受けているのか、想像するだけでも胃が痛み身がすくむ思いです。

そんな中、安倍自民党総裁は26日の神戸「正論」懇話会の中で憲法改正に大きく踏み込み、詳細は別紙コピーに譲りますが自衛隊を憲法に明記して、違憲か合憲かの不毛な議論に終止符を打ち、その期限を2020年五輪の年と明言を致しました。

一向に進まぬ改憲論議の矢面に立ち、内外の批判を恐れぬ歩武堂々の歩みには本当に頭が下がり、憲法改正が現実のものとなりそうな気配が濃厚となる中、与党や野党を巻き込んでの国民的大議論の火蓋を自ら切って落としたかのようです。

長期安定政権を築いた佐藤・中曽根・小泉首相の下では改憲論議そのものが起こらず、改憲を待望する良識的国民は切歯扼腕の思いで自民党に対して行動に移すよう、何度も何度も陳情した経緯があったように仄聞しています。

衆参議席3分の2を確保して改憲発議要件が整った今こそ、自民党はその党是である「憲法改正」を旗幟鮮明に打ち立てて国会を通過させ、国民投票に立ち向かわねばならぬと考えるところです。

結果を恐れず「山より大きな猪はいない」事を信じて、2020年までに憲法改正が実現するよう、宮崎支部会員の皆様にも更なるお力添えを願わねばなりません。

鬱陶しい毎日ですが切にご自愛の上、ご健勝を衷心より祈念申し上げます。

平成２９年７月１日

宮崎県防衛協会青年部会　宮崎支部長　小　倉　和　彦